

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 77 号

平成 20 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（4）

3 月 20 日 生き方の秘訣（2）

一日を神とともに始めよ。

神のおん前に出るとき、私たちの生活と行動は大きく変わってくるにちがいない。というのは、その時私たちはなにか天的なものをこの世の生活にもち込むからであり、また永遠の光によって時間の世界を見るようになるからである。そのときにのみわたしたちはすべてのものを、正しい価値観に従って見ることができるのである。

陰口を言うな。

他人の善いところよりも悪いところをいいふらすのが、世の人のつねである。お茶を飲みながら他人の名前を傷つけることをもって唯一の楽しみとしている人々がいる。

キリストの証しびとまた宣教師たれ。

キリスト教のただ一つの、ほんとうの広告は、クリスチャンである。逆にこういうこともいわれている。「教会にとっていちばん具合が悪いのは、クリスチャンと自称する人たちの好ましからざる生活

ぶりである」と。クリスチャンたるものは、世の光として生きるべく、少なくとも、努力すべきである。

神の言を学べ。

自分の行く道を調べずに旅に出るものはいない。聖書はクリスチャンのための、生命にいたる案内書である。クリスチャンは自分に向けられた神の言を見出すために、聖書を勉強しなければならない。

ブースの次の決意には二つのことが含まれている。

(a) 成長しつづけよ。

「潔め」を意味する新約聖書のことばは *hagiasmos* である。-*asmos* で終るギリシア語の名詞はすべて過程をあらわしている。だから「潔め」は「潔さに至る道」である。

(b) 心配するな。

自分になにがどういう順序で起こってくるかということは、摂理にかかわる事柄だから、神におまかせしておくべきである。心配ばかりしていると、いざことが起こった場合、これに対処することができなくなってしまうものである。とにかく、神は我々がどんな事態にぶつかってもそれに対応する力を、与えることのできるお方なのである。

毎日決意を新たにせよ。

われわれは決意をしても、すぐにそれを忘れてしまいやすい。決意をただけ、あとはどうでもよい、といったあんばいである。

われわれは毎日決意を新たにすることによって、日々挑戦と叱責を受けるのであり、またそれによって進歩するのである。

イエスはその力をわれわれに与えてくださるであろう。

3月22日 基準

これを欠いてはいかなる文明も崩壊せざるを得ないというものが3つある。この3つのものは社会を一つに結びつけるセメントであるといっている。

1 正直。これなしには事業も貿易も商業も人間関係もすべて崩壊せざるをえない。

自分では、チャンスがあれば不正な取引でもなんでもやるくせに、世の中のまじめで正しい人びとを当てにして、何とか社会を崩壊から守ってもらいたい、みんなが生きられるようにしてもらいたい、と願っている、そういう人間が今日いかに多いことか。

2 奉仕の精神

同胞のために、利益や報酬を当てにせず、何かをしようとする人たちがいない限り、つまり、たとえ少数でも、自分を捨てて生きようとする人たちがいないかぎり、社会の福祉と責任は全面的に崩壊してしまうだろう。

3 貞潔

貞潔と純潔と貞節がなかったならば、かならず家庭は崩壊する。そして家庭の崩壊は社会の崩壊につながる。

自分ではあらゆる道徳的基準をあざけりながら、しかも他のまじめな、ふつうの人たちにはキリスト教の道徳基準を守ってもらいたいと考えている人間が、はなはだ多い。

みずからはキリスト教道徳を捨てておきながら、しかもキリスト教の基準を受入れている人々を当てにして、何とか社会と文明を崩壊から守って欲しいと、十分意識的に、願っている人間が、きわめて多い。さればこそ、社会のパンだねとしての教会の責任は、今日、他のいかなる時代におけるよりも、いっそう重いといわなければならないのである。

3月24日 二位にとどまる

友だちが小さな詩を送ってくれた。それは祈りであって、わたしはこの詩が大好きである。

もっと立派なものをめざしたのだが、
ついに到達できなかった人、
もっと気高く生きたかったのだが、
世に輝くことのできなかった人、
短気をおさえようとしながらも、
どうにもそれのできない人、
事業で名を挙げ金持ちになる
そう願いつついつも貧乏、
利口でも善人でもなく、
努力しても無駄とと思っている人、
こういう人を、主よ、祝したまえ、
その一人なるしもべを祝したまえ、
そして、もう一度やってみる勇気を与えたまえ。

これは理由はともあれつねに2位にとどまらざるを得ない人たち、最後まで次善をもって満足しなければならない人たちのための祈りである。

世間にもてはやされている非常にすぐれた人物の影には、縁の下の力持ちがいるものである。

戦争中、もっともはなやかな將軍のなかにアメリカのパットン將軍がいた。彼はさながら突風のようにヨーロッパを席卷した。にぎりに真珠をちりばめた拳銃を持ち、宣伝に対する鋭い感覚をもっていた。

名声赫々(かくかく)たるパットン將軍の陰に、ひとりの静かな男が居た。その名前はだれも知らない。しかしその男が全軍を動かし

ていたのである。これは人生のいろんな場面で起こっていることなのである。

問題は仕事の種類ではなく、やり方である。

「あなたの仕事はなんですか」と問うべきではなく、「あなたは仕事に最善をつくしていますか」と問うべきである。ある古くさい詩の文句に、大事なのは試合に勝ったか負けたかではなく、堂々と戦ったかどうかである、というのがあがるが、まさにその通りである。「どんな奉仕も神の眼には同じ」ということばは、ここにもよくあてはまる。

われわれ大部分のものは一位にはなれず、次善をもって満足しなければならぬだろう。脚光を浴びることもなく、いつも舞台裏で働かざるをえないだろう。しかし夕方になったとき、影の働きが明るみに出され、報われなかった仕事が報われるだろう。そして多くの先なるものは後になり、後なるものは先になるであろう(マタイ 20・1-16)

われわれの仕事は何であれ、神がこれを必要としておられるのである。神はわれわれを必要としておられるのであって、大切なのは仕事そのものではなく、仕事のやり方なのである。

3月28日 真理に人を導く書物

真理が明らかに顕わされ、明らかに見て取れるのは、聖書においてだけである。では、特にどういう点についてそうなのか、考えてみよう。

聖書は正しい人間観を示している。

聖書ほど現実的なものの見方をしている本は他にない。...

聖書は、人間の歴史に三つの段階を見ている。

- 1 神はご自身のかたちに似せて人間をお創りになった。
- 2 罪が入ってきて神の計画を打ち破ってしまった。
- 3 イエス・キリストがあらわれ、キリストにおいてのみ人間は目的通りの存在となりうる。

聖書は正しい世界観を示している。

世界は軽蔑してもいけないし、崇拝してもいけないというのが聖書の見方である。この世はわびしい砂漠でもなければ神の楽園でもない。イエスの数多くのたとえ話は、この世界が永遠の世界のための訓練と試練の場所であることを示している。

この世は、来世に備えて自己を鍛えるための闘技場である。この世の生活から身を引いてはならない、と聖書はいう。新約聖書の中で、あの1タラントを正しく使うことをしなかった男ほどにきびしく非難されている人間はいない(マタイ 25:24-30)。

かといってこの世のことにのみ没頭してはならない。新約聖書の中で、ほかのだれよりもそのおろかさを厳しく指摘されているのは、自分の財産のことしか頭になかったあの愚かな金持ちである(ルカ 12:13-21)賢い人は、この世から身を引くことも、この世のことに没頭することもしない。彼はこの世界を、自分の魂を鍛えるための学校と見るのである。

イースター(復活節) 彼はよみがえりたまえり！

初代教会にあっては、復活こそ教会の星座における最大の星であった。復活は、すべての礼拝及びすべての生を基礎づける唯一の、栄光に満ちた事実だったのである。この中心的なイースター信仰、つまり復活信仰に、わたしたちはたえず戻ってゆくべきである。

われわれが人生に対処しうるのは、イースター信仰、復活して今もなお生きたもう主に対する信仰によってである。

というのは、イエス・キリストが復活して今も生きておられることを信ずるとするならば、当然、すべての生は彼の恩前において営まれてこと、私たちが一人ではけっしてないこと、またキリストなしに努力したり、悲しみを忍んだり、誘惑に直面したりする必要のないこと、を信じないわけにはいかないからである。

われわれが死に直面しうるのは、イースター信仰、復活して今もなお生きたもう主に対する信仰によってである。

生きて死に、そしてまたとこしえに生きたもうお方、死を征服なさったお方を、友人としてまた仲間として持っている、というのがイースターの信仰である。この世の生活においてわれわれとともにいますお方は、死においても、死のかなたの生活においても、われわれとともにいてくださるのである。…

イースター信仰は、一年のある時期にだけ考えることではなく、クリスチャンがそれによって毎日生き、それによって最後に死ぬ(それもふたたび居きりためだが)そのような信仰でなければならない。

4月2日 何かが起きるそのためには...

パウロは「わたしは福音を恥としない」といった(ローマ 1・16)。原文のギリシア語では、このことばはもっと強い意味を持っている。というのは、非常に強い積極的なことをいうのに否定的な形を用いるのがギリシア語の表現法だからである。つまり、控えめな表現によって大変強い発言をするわけである。だからパウロのこのことばも、つぎのように翻訳したらいっそう真意に近いものとなるだろう。「わたしはイエス・キリストの福音を誇りとしている」。・・・

クリスチャンは自分がクリスチャンであることを人に見せるのを誇りに思わなければならない 教会の中だけでなく、いたるところにおいて。

キリスト教が仕事の中にあらわされなければならない。

そのためには、このたるんだ、いいかげんな時代にあって、自分の腕に誇りをもつことである。つねに良心的で、仕事を手っ取り早くやろうと思わず、できるだけよくやろうと考えるべきである。

キリスト教が遊びのうちにもあらわされなければならない。

スポーツにおいてもはっきり示されなければならない。

社会的良心という形であらわされなければならない。

政治問題、組合問題、地方政治の問題について十分に責任を負うのがクリスチャンの義務である 支持する政党の如何にかかわらず。

すべてのクリスチャンが、「わたしはイエス・キリストの福音を誇りに思っている」といえるなら、必ず何かが起こるはずである。

4月3日 いやとはいわせない

スロ・フェニキアの女がイエスに、病気の娘をいやしていただきたいと願った(マルコ7・24 - 30)。だが彼女はユダヤ人ではなく、イエスの使命はまずユダヤ人に向けられたものであった。そこでイエスは、今はあなたを助けるわけには行かない、と答えた。

「子どもたちのパンを取って、それを子犬になげてやることはできない」と彼は言った。「おっしゃる通りです。でも食卓の下に居る子犬だって、子供たちの残したものはもらえるではありませんか」。これを聞いてイエスは言った。「それだけ聞けばもうよい。安心して家に帰りなさい」。彼女が家に戻ると、娘の病気は治っていた。それだけ聞けばもうよい。

スロ・フェニキアの女はいやとはいわせなかった。...

わたしたちは、本気で何かを仕遂げようと思うなら、どんなことがあっても引きさがらない人間にならなければならない。

スロ・フェニキアの女は、快活な答の価値をみいだした。

わたしたちは、最初の拒絶にぶつかると、すぐにかんしゃくを起こしたり、ぶすっとふくれたり、いかにも恨みがましい顔つきをしたりする、また満身これ怒りといった態度で引き返していく。だから目的物を手に入れることができないのである。逆に、笑いながら冗談まじりの受け答をするなら、案外うまくいくものである。

忍耐と快活さがあれば、たいていのことはできるはずである。目的物が手にはいない場合でも、笑っていられるはずである。

世界はこういう人を必要としているのではないだろうか。

4月5日 気をつけよ！

わたしたちは子どもたちの前にどんな模範を示しているだろうか。
結婚について、家庭内における夫婦の関係について、子どもたち
にどんな考え方を植えつけているだろうか。

子どもたちは親の姿を見て、結婚とは二人の人間がことごとくに口論し、けんかし、どなり合うことである、というふうに考えてはいないだろうか。それとも彼らは、結婚とは二人の人間が完全に一致和合する関係である、と考えていてくれるだろうか。

結婚とは不安な、不幸な、不愉快な関係である、また家庭とはたえまのない口論とけんかの闘技場である、と無意識に子どもが考えるような、そんな子供の育て方をしてはいないだろうか。それとも、結婚とは最も完全な関係であり、家庭とは仲間同士が仲よく一緒に暮らす場所である、と考えるように、育てているだろうか。

仕事について子どもたちにどんな考え方を植えつけているだろうか。...仕事をきちんとやりとげた時の喜びほど大きな喜びはないこと、時計ばかり見たり、給料袋の中ばかりのぞいたりすることなく、なんとか仕事を上手にやろうと一生けんめいになっている人たちがいること、またたとい小さな不正であってもクリスチャンはそういうことをやってはいけないこと　こういうことをわたしたちは子供に教えているだろうか。...

教会について子どもたちにどんな考え方を植えつけているだろうか。...教会というのは、よろこんで「登りゆく」べき所、友だちを見出し、人びとを助ける　それは喜びでありまた特権でもある　そういう場所だ、と教えているだろうか。

模倣は神から与えられた能力である。わたしたちは模倣することによって学ぶのである。われわれ人の子の親たるものは、子供たちが親の真似をしているということを忘れてはならない。子どもは神からの預かり者である。責任の重大さを思うべきである。